

## 湿地の現状分析

### 1. 湿地の現状分析

#### (1) 全国的な傾向

分析方法 961 湿地（生物分類群毎）のうち、情報が得られた 813 湿地について、「顕著な変化なし」「改善傾向」「悪化傾向」に分け、その湿地数と割合を整理した。

複数の情報提供者から異なる情報（例えば、「顕著な変化なし」と「悪化傾向」）が寄せられた場合には、情報の内容を総合的に判断し、いずれかのカテゴリーに分けた。

評価（資料2の別紙1も参照のこと）



- (1) 湿地の劣化は、すべての生物群に及んでおり、全体的に見れば、湿地環境は悪化傾向にある。とくに、淡水魚類、爬虫両生類、ウミガメの生息環境が悪化している
- (2) 一方、調査や保全・再生の取組が進められた結果、とくにサンゴ礁、淡水藻類、シギ・チドリ類などの鳥類については、環境が改善傾向にある湿地も見られた

#### (2) 劣化の要因

分析方法 961 湿地（生物分類群）のうち、「悪化傾向」にある 514 湿地のうち、劣化要因について情報のあった 368 湿地について、その主たる要因を以下のとおり分類した。

- ・ 「第1の危機」（開発など人間活動による危機）
- ・ 「第2の危機」（自然に対する働きかけの縮小による危機）
- ・ 「第3の危機」（外来種など人間により持ち込まれたものによる危機）
- ・ 「第4の危機」（地球温暖化や海洋酸性化など地球環境の変化による危機）
- ・ 「複合的要因」（第1から第4の危機とその他の2つ以上に該当するもの）
- ・ 「その他」（人為的な影響によらない地震や津波など自然災害等）

評価（p.2も参照のこと）



- (1) 「第1の危機」、とりわけ埋め立てや護岸整備等の開発の影響が大きかった
- (2) 「第2の危機」では、ニホンジカやイノシシによる湿原植生への食害が多く報告された
- (3) 「第3の危機」では、淡水魚類などに対して、依然として、国外外来種のおオクチバスの在来種への捕食圧が大きいほか、モツゴなど国内外来種による影響がでている湿地もあった
- (4) 「第4の危機」の割合が「第1の危機」に次いで大きく、地球温暖化による海水温の上昇が、とくに藻場やサンゴ礁に見られた
- (5) 第1から第4の危機とその他のうち2つ以上が主因となって、湿地環境の劣化を引き起こしている事例もあった
- (5) 「その他」では、とくに東北地方の湿地で、津波や地盤沈下による影響が大きかった

## 2. 全国的な湿地の「劣化要因」と「面積の変化」

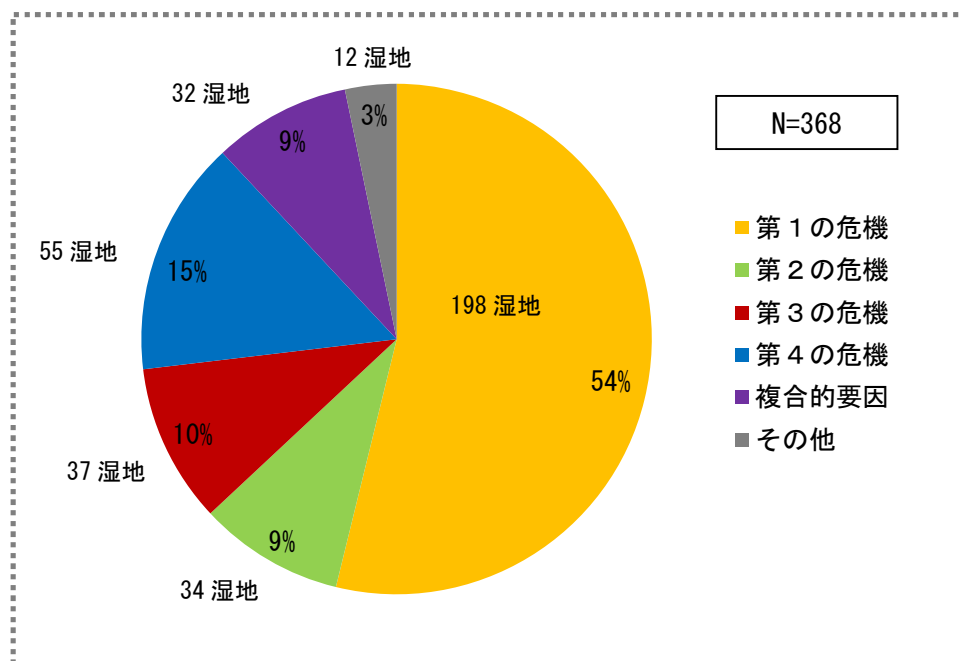


図1. 劣化要因

961 湿地（生物分類群毎）で悪化傾向にある湿地のうち、劣化要因が示された 368 湿地について分析

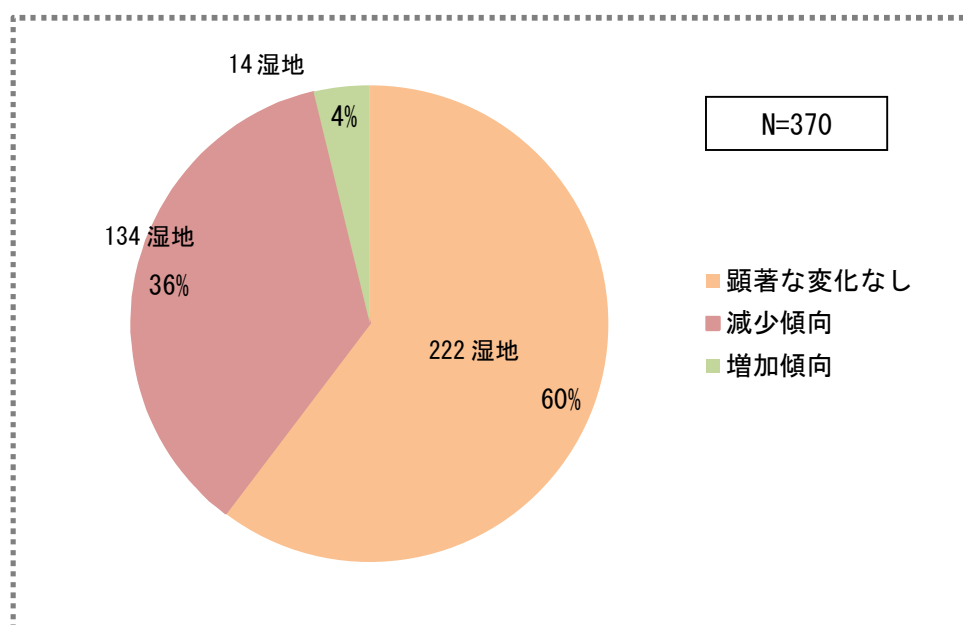


図2. 面積の変化

『日本の重要湿地 500』で、湿地面積について情報があつた 370 湿地について分析（複数の情報があつたものについては、情報が得られた年などを総合的に評価）

### 3. 劣化要因の詳細な分析

分析方法 「悪化傾向」にある湿地（生物分類群毎）のうち、劣化要因について情報のあった湿地（生物分類群毎）について、その主たる要因（件数）を分析した。

評価 （複数回答あり）



#### 1. 湿原植生

湿原植生で選ばれている 136 の現行重要湿地のうち、少なくとも約 5 割で、湿地環境の悪化傾向が見られた。劣化の要因について、植生変化・遷移、湿地の乾燥化が生じているという報告が多く寄せられた。そのほか、開発工事（第 1 の危機）や外来種（第 3 の危機）が劣化要因となっている湿地もあった。具体的には、湿原の乾燥化が進むと分布を広げるササ類の影響や、全国で増加しているニホンジカの食害や踏圧が報告されている。

- (ア) 植生変化・遷移(9 件)
- (イ) 開発工事(7 件)
- (ウ) 乾燥化(7 件)
- (エ) 外来種(とくにオオハンゴンソウ)(6 件)
- (オ) ニホンジカなどによる食害(5 件)
- (カ) 水質汚濁(3 件)
- (キ) 地盤沈下・津波(3 件)
- (ク) 野生生物増加(2 件)
- (ケ) 採集圧(2 件)
- (コ) その他(12 件)

#### 2. マングローブ林

マングローブ林で選ばれている 37 の現行重要湿地では、湿地環境の顕著な悪化傾向の報告はあまり多くない（1 割未満）。しかし、植生変化が生じているという報告が多く寄せられた。そのほか、泥土堆積・泥土流出や開発工事（第 1 の危機）が劣化要因となっている湿地もあった。なお、外来のマングローブ種の植栽によりマングローブ林が拡大している事例があった。

- (ア) 植生変化(6 件)
- (イ) 泥土堆積・泥土流出(4 件)
- (ウ) 開発工事(3 件)
- (エ) 外来種(2 件)
- (オ) 浸食(2 件)
- (カ) その他(2 件)

#### 3. 藻場

藻場で選ばれている 129 の現行重要湿地のうち、少なくとも約 5 割で、湿地環境の悪化傾向が見られ

た。劣化の要因について、温暖化・高水温化の影響（第4の危機）が見られるという報告が多く寄せられた。これらの影響は、しばしば磯焼けなどの現象とともに報告された。魚類による海藻の捕食や、開発工事に加えて、東北地方では津波の影響が見られる湿地も残っていた。

- (ア) 温暖化・高水温化(17件)
- (イ) 食害(アイゴなど)(11件)
- (ウ) 開発工事(9件)
- (エ) 水質汚濁(7件)
- (オ) 震災・津波・地盤沈下(6件)
- (カ) その他(10件)

#### 4. サング礁

サング礁で選ばれている31の現行重要湿地のうち、現行の重要湿地の少なくとも約4割で、湿地環境の悪化傾向が見られた。劣化の要因について、海水温の変動、捕食者の増加による影響が多く報告された（第4の危機）。そのほかにも、陸域からの赤土の流入と堆積が、サング礁を劣化させる要因となっていた。ただし、この10数年で、衰退したサング礁が回復傾向にある場合も報告された。

- (ア) 食害(オニヒトデ)(5件)
- (イ) 高水温化(2件)
- (ウ) 赤土流入・流出(2件)
- (エ) 食害(トゲレイシダマシ)(1件)
- (オ) 台風(3件)

#### 5. 水草

水草で選ばれている55の現行重要湿地のうち、現行の重要湿地の少なくとも約4割で、湿地環境の悪化傾向が見られた。劣化の要因について、水質汚濁、開発工事、富栄養化（第1の危機）の影響が大きいという報告が多かった。また、外来種（第3の危機）や管理不足（第2の危機）が劣化要因となっている湿地もあった。劣化が進むいくつかの湿地では、選定根拠となった種が消滅した湿地もあった。

- (ア) 水質汚濁(4件)
- (イ) 開発工事(4件)
- (ウ) 富栄養化(3件)
- (エ) 外来種(アメリカザリガニ、ミシシippアカミミガメ)(3件)
- (オ) 管理不足(3件)
- (カ) 水量減少・乾燥化(3件)

#### 6. 淡水藻類

淡水藻類で選ばれている27の現行重要湿地のうち、少なくとも約6割で、湿地環境の悪化傾向が見ら

れた。劣化の要因について、開発工事（第1の危機）のほか、外来種（第3の危機）や管理不足（第2の危機）など多岐にわたっていた。いくつかの湿地では、選定根拠となった種が見られなくなっている湿地もあった。

- (ア) 開発工事(2件)
- (イ) 外来種(ウチダザリガニ)(1件)
- (ウ) 管理不足(1件)
- (エ) 植生変化(1件)
- (オ) 水量減少(1件)
- (カ) その他(2件)

#### 7. シギ・チドリ類

シギ・チドリ類で選ばれている54の現行重要湿地のうち、少なくとも約7割で、湿地環境の悪化傾向が見られた。劣化の要因について、開発工事（第1の危機）の影響がとくに大きかった。また、津波の影響が大きい湿地や、利用者の増加（第1の危機）が劣化要因になっている湿地もあった。具体的には、浚渫工事などの影響で、干潟の泥質が変化し、生息環境が変化したことにより渡来数が減少していることなどがモニタリングデータから明らかにされた。

- (ア) 開発工事(12件)
- (イ) 底質変化(3件)
- (ウ) 植生変化(2件)
- (エ) 浸食(2件)
- (オ) 津波・地盤沈下(2件)
- (カ) 利用者増加(2件)
- (キ) その他(7件)

#### 8. ガンカモ類

ガンカモ類で選ばれている60の現行重要湿地のうち、少なくとも約4割で、湿地環境の悪化傾向が見られた。劣化の要因について、開発工事（第1の危機）の影響がとくに大きかった。また、津波の影響が劣化要因になっている湿地もあった。

- (ア) 開発工事(4件)
- (イ) 震災・津波・地盤沈下(2件)
- (ウ) 乾燥化(1件)
- (エ) 土砂流入(1件)
- (オ) その他(6件)

#### 9. その他鳥類

その他鳥類で選ばれている35の現行重要湿地のうち、少なくとも約4割で、湿地環境の悪化傾向が見

られた。劣化の要因について、開発工事や土砂の堆積、利用者の増加（いずれも第1の危機）が原因になっている湿地もあった。具体的には、高速道路建設などに伴い、生息地が狭められている場合があった。

- (ア) 開発工事(2件)
- (イ) 土砂堆積(1件)
- (ウ) 利用者増加(1件)
- (エ) その他(1件)

#### 10. 淡水魚類

淡水魚類で選ばれている73の現行重要湿地のうち、少なくとも約8割で、湿地環境の悪化傾向が見られた。劣化の要因について、外来種の影響（第3の危機）が、開発工事（第1の危機）とともに大きかった。また、乱獲（第1の危機）が劣化要因となっている湿地もあった。選定の根拠となった種が確認されていない湿地もあった。

- (ア) 外来種(オオクチバス、ブルーギルなど)(22件)
- (イ) 開発工事(20件)
- (ウ) 草地化(8件)
- (エ) 観光客による生息地の過剰利用・乱獲など(6件)
- (オ) 放棄地増加(3件)
- (カ) 台風・豪雨(3件)
- (キ) 震災・津波・地盤沈下(2件)
- (ク) その他(8件)

#### 11. 爬虫両生類

爬虫両生類で選ばれている25の現行重要湿地のうち、少なくとも約8割で、湿地環境の悪化傾向が見られた。劣化の要因について、開発工事（第1の危機）のほか、生息地の乾燥化や、管理不足（第2の危機）が原因となっている湿地もあった。具体的には、生息地である湿原植生が貧弱になり、夏季に乾燥化することなどで、生息環境が悪化している事例が報告された。

- (ア) 開発工事(5件)
- (イ) 乾燥化(4件)
- (ウ) 放棄地増加(2件)
- (エ) 生息地の踏みつけ(2件)
- (オ) その他(6件)

#### 12. ウミガメ

ウミガメで選ばれている12の現行重要湿地のうち、少なくとも約8割で、湿地環境の悪化傾向が見られた。劣化の要因について、開発工事や砂浜の浸食の影響が大きい湿地が多かった。「その他」には、

産卵場での過剰な観光利用により、繁殖が妨げられている事例や、タヌキによる卵の食害の事例が含まれる。

- (ア) 開発工事(2件)
- (イ) 浸食(2件)
- (ウ) その他(5件)

### 13. 昆虫類

昆虫類で選ばれている112の現行重要湿地のうち、少なくとも約5割で、湿地環境の悪化傾向が見られた。劣化の要因について、開発工事（第1の危機）のほか、生息地の乾燥化や植生変化・遷移、外来種の影響（第3の危機）の影響が大きい湿地が多かった。そのほか、捕獲圧（第1の危機）の影響も報告される湿地が多かった。ただし、湿地現況の情報が得られなかった湿地もあり、悪化傾向にある湿地の割合がこれよりも多い可能性がある。

- (ア) 外来種(ウチダザリガニ, オオクチバス, ブルーギルなど)(17件)
- (イ) 開発工事(14件)
- (ウ) 乾燥化・干ばつ(14件)
- (エ) 植生変化・遷移(10件)
- (オ) 利用者増加・捕獲圧(8件)
- (カ) 富栄養化(2件)
- (キ) その他(9件)

### 14. 甲殻類

甲殻類で選ばれている17の現行重要湿地のうち、少なくとも約5割で、湿地環境の悪化傾向が見られた。劣化の要因について、植生変化や、開発工事（第1の危機）が影響している湿地があった。具体的には、道路工事に伴う土砂の流入により、生息環境が悪化している場合があった。

- (ア) 植生変化(3件)
- (イ) 開発工事(2件)
- (ウ) 外来種(1件)
- (エ) その他(5件)

### 15. 淡水貝類

淡水貝類で選ばれている50の現行重要湿地のうち、少なくとも約6割で、湿地環境の悪化傾向が見られた。劣化の要因について、開発工事や水質汚濁など（第1の危機）の影響が大きかった。また、外来種の影響（第3の危機）が劣化要因となっている湿地もあった。湖底の溶存酸素の減少や底質の変化などにより、生息環境が悪化している場合があった。

- (ア) 開発工事(8件)
- (イ) 外来種(7件)

- (ウ) 水質汚濁(4件)
- (エ) 水質・水量変化(4件)
- (オ) 貧酸素(2件)
- (カ) その他(8件)

#### 16. 底生動物

底生動物で選ばれている108の現行重要湿地のうち、少なくとも約7割で、湿地環境の悪化傾向が見られた。劣化の要因について、開発工事に加えて、東北地方では津波の影響が、多く報告された。ただし、津波により生息環境が劣化した湿地でも、種の多様性が回復しつつある干潟もあった。

- (ア) 開発工事(21件)
- (イ) 震災・津波・地盤沈下(13件)
- (ウ) 富栄養化(4件)
- (エ) 土砂流入・土砂減少(3件)
- (オ) 台風・豪雨(3件)
- (カ) 植林(2件)
- (キ) その他(9件)

以上